衣の NGO

ふるぎのゆくえをおいかけて

JFSA

ゆたかなくらしをささえる
せかいのまずしさをかんがえる

NPO 法人日本ファイバーリサイクル連帯協議会
〒260-0001 千葉市中央区都町 3-14-10
TEL/FAX:043-234-1206
E-mail jfsa@f3.dion.ne.jp
URL https://jfsa.jpn.org

会報62号 2023年9月

第５分校　１年生の授業風景　　バローチ、ブラーフィー、サライキ、パシュトー、シンディなどの様々な民族や、インドやバングラデシュからの避難民を意味するマハジールが混ざって学ぶ。学校では国語のウルドゥー語を使うが、家ではそれぞれの民族の言葉で話す。

◆◇JFSA ホームページ
Facebook ページもごらんください◇◆

JFSA HP　JFSA Facebook　JFSA インスタグラム

パキスタン派遣報告

派遣期間：2023年8月29日(火)～9月10日(日)　海外事業担当　依知川　守

物価の高騰により人々の生活がより苦しく

今回パキスタンを訪問している間に、知人の家が強盗に入られたという話を数回耳にしました。背景には人々の暮らしが急激に苦しくなっている現状があります。食料品の価格や電気料金等そしてガソリン代は2年前と比べ概ね3倍に高騰しています(この会報を書いている数日の間にもガソリンが一気に十数円上昇しています)。

アル・カイールの生徒の親や兄弟の多くが建築現場で日雇い仕事をしていますが、建築資材も値上がりしているため、工事が控えられて仕事は大幅に減っています。また電力不足や原材料費の値上がりにより繊維関連の工場も数多く閉鎖されてしまい、失業者が急増しているそうです。スラムで暮らす人々にとって公的な支援は期待できないため、食べる量を減らすしか対処のしようがないと言います。アル・カイールは引き続き生徒や先生、スタッフに対する食料支援を継続しており、生徒数の大幅な減少には至っていませんが、今後生徒が学び続けられるか心配されます。

アル・カイールアカデミーの教育事情

▼本校

校舎の修繕工事が行われていました。校舎内には技術コースが開設されており、近所の女性達を対象とした縫製コース(他に第6、第8分校に併設)、男子生徒のための空調技術コースに加え、今年1月からは電気コース、ソーラーパネルのコースも新たに始まりました(6か月のコース)。今後も仕事に直結するコンピュータ会計やグラフィックデザインのコースの開設を目指したいそうです。

本校にて：男子は3年生～5年生で仕事などの理由で辞めていく生徒も多い

▼第2分校（カチラクンディ）

分校の上の丘に登り遠くへ目をやると、これまでとは違いゴミが高く堆積しているエリアがありました。理由は、政府がゴミの野焼きを制限する政策を取っているからだそうです。今は閉校されてしまった第7分校で先生をしていたサイマさんは「子育てが落ち着いたらまた先生の仕事をしたい」と話してくれました。

元第7分校の先生だったサイマさん（奥右）と家族

▼第3分校

カラチに到着する数日前の夜中の3時頃、10～15人の強盗団に襲われました。守衛は縄で縛られ、数時間の間にコンピュータやソーラーパネル、扇風機、コード類などが盗まれてしまいました。アル・カイールはこの件を警察に届け出たそうですが解決は望まれないそうです。この事件以降、本校や各分校には、銃を携帯した警備をつけることにしました。

▼第5分校

これまで12年間本校で先生として働いてきたサフィアさんは、5ヶ月前にこの分校の校長に着任しました。幼児クラスから10年生(14歳位)まで通っていますが、男子は5年生以降、仕事のために中退する生徒が増えます。また女子が学び続けるためには家族の理解が必要です。

「この3年生の生徒(写真左)は2ヶ月前から学校を休んでいたので、先日学校に呼んで理由を尋ねたところ、家族に学校へ行くことを反対されていることが分かりました。私たちは家族を説得し、5年生までの進学に同意を得ることができました。学校は飛び級も可能なので、この2年でできるだけ多く学べるようにしたいと思います。学び続ける姿を見て、家族が考えを変える可能性もゼロではありません。また卒業生から初めて女子1名がアル・カイールカレッジに進学しました。彼女は移動手段が問題で週一日のみ通学して、他の日は地元の塾へ通っています。またスマホを使ってカレッジの同級生のノートをシェアしてもらい勉強しているんですよ」とも教えてくれました。既に第5分校は生徒数が満員状態で8、9、10年生の授業は屋外で行なわれていました。

親を説得して再び学校へ来られるようになった3年生の生徒

第5分校
教室が足りず屋外で授業を受ける10年生

※第5分校：廃校だった公立学校の建物を使い、2015年からアル・カイールが運営しています。シンド州では、公立の学校の内、約5200校が廃校の状態と報じられています。

▼第6分校

最も生徒の数が増えており、本校とこの分校のみ午前・午後の2部制になっています。増築され大きくなった校舎を副校長のシャヒダさんが案内してくれました。シャヒダさんはアル・カイールの卒業生ですが、在学時代まだこの分校は無く、彼女はこの地域から30分位かけて本校へ通っていたそうです。卒業生が分校の副校長を任せられている姿を見て大変心強く感じました。

アル・カイールが学校を運営する地域の中でも、この分校周辺は学校へ行く機会の無い子どもの数が特に多いそうです。現在は徒歩で30分位の距離から通う生徒も多くいますが、将来的にはこの地域に更に分校を作りたいとムザヒル校長は話していました。

シャヒダさんにアル・カイールの特徴について伺いました。「アル・カイールでは生徒への教え方に独特のポリシーを持っています。生徒に教科書をただ暗記させるのではなく、教師が独自に質問を考え、生徒とやり取りをしながら教えていきます。私たちの教師は他校からも高い評価を得ていて、ヘッドハンティングされることもあります」

▼第8分校(女子高)

分校長フォージアさん(勤続22年)

2020年3月に開校し、現在は1年生から10年生までが学んでいます。これまでの第3分校(男女共学)では5年生以降中退せざるをえなかった女子生徒も、女子校であることで家族の理解を得て学び続けることができています。

※第4分校、第7分校は賃貸契約の問題などにより閉校されました。

※コンピュータークラスは、この2年で第1、第3、第6、第8分校とカレッジまで広がりました。低学年は皆で大きなモニターでアニメを見てコンピュータに親しむ事を大切にし、2年生以降はゲーム感覚でプログラミングを学べる専用のソフトが導入されています。

本校のコンピュータークラス

生徒のインタビュー

ワジハさん 8 年生(14 歳)

ワジハさん(左)と同行者の仲庭さん(オイシックス・ラ・大地職員)　手にはメヘンディ

好きな科目は生物。大学まで進学して、その後は美容師になりたい。美容師はヘアーカット、メイクアップ、メヘンディが必須。メヘンディは 6000 ルピー払って美容師に教えてもらった。繁忙期に先生の店を手伝い、売上の半分をもらっている。ちなみに結婚式などで両手両足に沢山のメヘンディを描くと、料金は 6～7000 ルピー(4～5 時間)。将来、自分の店「ビューティーパーラー・ワジハ」を開店したい。　※1 ルピー≒0.5 円

父:アブドゥル・カーディルさん(46 歳)

1989 年、両親と家族一緒に、電車でバングラデシュからカラチへ移住した。途中デリーで 3 日滞在したのを覚えている。当時はビザなど厳しくなく、検問などでも「パキスタンに行く」と言えばそれだけで問題なく来られた。その後は往来がとても厳しくなった。パキスタンに来てから長男のアブドゥルさん(当時 12 歳)と次男の弟は父親と共に縫製の工場で仕事を始めた。下の弟 2 人は私立の学校へ行かせた(当時の学費 150 ルピー／月)。アブドゥルさんは学校へは全くいけなかったため、今でも仕事で必要な読み書き以外はできない。その後タニアさんと結婚し、義父の魚のフライ屋台の販売を手伝うようになり、やりがいがあったため独立し 19 年間続けている。毎日市場で魚を仕入れ、色々な種類の魚のフライやケバブを販売している。屋台の名は「マッシャッラー・フィッシュ・コーナー」

営業は 18 時～夜中の 3 時まで　売上は 1 日 3～4000 ルピー位(フライ:850～1000 ルピー／㎏　ケバブ:30 ルピー／1 ヶ　)

警察や政府の役人に 4000 ルピー位／月の賄賂を要求される。仕事の休みは年に 15 日程度(宗教行事など)

母:タニアさん(35 歳)

8 年生までアル・カイールで学んだ。ハーフィス(コーランを全て暗記している)で、14～15 時、自宅に近所の子どもを集め、ワジハさんと共にコーランを教えている。

祖父(母方):ムハマド・アラウディンさん(75 歳)

1982 年、ビハール州の友人ら 30 名と一緒にカラチへ移住し、家族の受け入れ準備をする(バングラデシュでは消防士をしていたが給料はとても安かった)。1989 年、娘タニアさん(ワジハさんの母親)が 1 歳の頃に家族をカラチへ呼び寄せた。その後 3 人の子どもがカラチで生まれる。初めは縫製の工場で働き、その後は野菜や魚のフライを屋台(テーラー)で売るようになる。ムハマドさんは一度バングラデシュへ家族に会いに行くが、ビザの問題などでパキスタンへ戻れなくなる。当時はまだ子どもたちが小さかったので、暮らしていくために祖母は縫製工場で仕事を始めた。タニアさんも 8 年生でアル・カイールを中退して母と共に働いた。5 年後にようやく祖父ムハマドさんがカラチへ戻ることができたが、それはタニアさんの結婚直後の事だった。

ワジハさんのお宅

上段左お父さん、中段左お祖母さん

下段右お母さん、下段左ヤスミン先生

電気(公式):11500 ルピー／月　ガス(公式):3～400 ルピー／月(※屋台のガスは別のボンベ)　水(非公式)

(アル・カイールスタッフのアサドさんは、この家族なら 1 ヶ月に 7 万ルピー位の生活費が必要だろうと言っていた)

ワジハさんのきょうだい　長男シャヘリアール(17 歳、公立カレッジ 2 年)今はカレッジに通いながら、見習い(無給)をしている

長女ワジハ(14 歳、アル・カイール 8 年生)　次女タスミア(11 歳、アル・カイール 6 年生)

三女ハディージャ(8 歳、アル・カイール 2 年生)　四女ファトマ(5 歳、アル・カイール KG2)

洪水被災地ブンド村を訪問　訪問日：8 月 31（木）～9 月 1 日（金）　ブンド村：125 世帯（人口約 1,250 人）

私にとっては昨年 11 月に続いて 2 回目の訪問でした。前回はまだ多くの住居や畑が水没しており、場所によっては村と村の移動に船が必要でした。今回は少なくとも主要道路の周辺は水も引いて作付けも始められていました。私はアル・カイールのメンバーと、被災地の現状と暮らしを理解するため、村人のハムゾーさん（57 歳）、リアーズ・フセインさん（42 歳）、イマーム・アリさん（48 歳）にインタビューをしました。

村人にインタビューする依知川事務局（中央）

Q. 洪水以前の暮らしはどのようなものでしたか？

［ハムゾーさん］ 主に作付けや収穫などの時期は畑で働き、それ以外は左官、大工、物売り等様々な仕事を求めて町へ行きます。離れた町の場合は 1 ヶ月程度の出稼ぎをすることもあります。

Q. 農業は具体的にどのような形なのですか？

［ハムゾーさん］ 6 月～11 月は米、11 月～3 月は小麦を作る二毛作です。稲作の後はそのまま残った水分で小麦を作っています。小麦は次期に種として使用できますが、米は 10 年程前から中国製のハイブリッド種に変わったため次期の種としては使えません。ハイブリッド米は以前の品種に比べて少ない水量で作ることができ、収穫期間は 1 ヶ月短縮され収量は 2 倍程です。ただしこのハイブリッド米は基本的に輸出用なので私たちが食べることはありません。

洪水で多くの家が流されてしまったブンド村

昨年、洪水後初めて小麦を作付けしましたが不作でした。今年は 6 月に稲作を再開し、今回の米はしっかり実ることを期待しています。野菜など他の作物は常に水を必要とするのでこの村では作ることができません。以前は水牛 4～5 頭、牛 2～4 頭、山羊 8～10 頭を飼育していましたが洪水で餌が流されてしまい、飼育を諦めて全て相場の半値程で売ってしまいました。

Q. 畑の広さはどの位ですか？

［リアーズ・フセインさん］ この村の場合、大体 1 家族で 2 エーカー位の畑を耕作しています。村には大きな地主はおらず、自分の土地や知り合いの土地を使っています。土地は先祖代々兄弟姉妹で平等に分配されてきました。　※1 エーカー＝約 4047 ㎡

Q. 農作業はどのように行なうのですか？

［リアーズ・フセインさん］ 大掛かりな作業は 25～30 人位で行ないます。作業は近い親戚なら無給で手伝い合い、遠方から来てもらう場合は有給で頼みます。賃金は 1 日 500 ルピー（約 250 円）程度です。

Q. 村には学校やモスクはありますか？

［イマーム・アリさん］ 村のすぐ側に政府の学校がありますが、先生が来たり来なかったりです。私の娘は、6 年程前に村から 2km の所で政府系 NGO が開いた学校に、友達 4 人でリキシャに相乗りして通学しています（1 万ルピー/月）。この村には 5～6 人がお祈りできるくらいの広さの小さなモスクが 2 つあります。

Q.病院へ行く時はどうするのですか？また病院代や作付けの種代、肥料代はどうするのですか？

［ハムゾーさん］ 村から 2 km 先に小さなクリニックがありますが、そこで治らない場合は 70 km 先のラルカーナや 350 km 先のハイデラバードまで行く必要があります。**［イマーム・アリさん］** 実は先日娘が急病になり、ラルカーナの病院で治療を受けなければならなくなりました。移動費、治療費、薬代、食事代、部屋代など合わせて約 15 万ルピー（約 7 万 5 千円）かかり、農機具の修理費用として貯めていた 10 万ルピーを充て、修理はローンで頼むことにしたのです。私たちはお金を蓄える余裕がありませんので、医療費など急にお金が必要な場合はバイクや水牛を売ったり、それが出来ない場合は親戚からの借金で工面します。洪水以前から種や肥料を現金で買える人はほとんどいませんでした。私たちは収穫後に支払う後払いを続けてきました。その場合、現金価格より 37.5%高くなります。

Q. 最後に住宅の支援についてどのように思いますか？

［ハムゾーさん］ 昨年の大洪水では 3 ヶ月間に渡り雨が降ったり止んだりを繰り返し、最終的には 3 日間雨が降り続きました。2010 年の洪水は、主にバローチスタン州の山から流れてきた水が原因でしたが、今回はそれにこの地域で降り続いた雨が重なったため大災害となりました。私たちの村はありとあらゆる物が流されてしまい、暮らしは 20 年前に戻ったようです。しかし皆さんが家を建ててくれたおかげで、雨の日でも夜安心して眠れるようになりました。本当にありがとうございます。村にはまだ家を必要としている家族がいます。引き続き支援をお願いします。

村の子どもたちに囲まれるリアーズ・フセイン氏（インタビューした男性）

家がまだ建てられていない人はテント暮らしが続く

家がまだ建てられていない家族の調理場

フォト ギャラリー

بسر کرنا

「バサル　カルナー」

意味　暮らす、過ごす

洪水被災地ブンド村で

住宅再建のために 2010 年の洪水時に埋まってしまったレンガを掘り出す男性

第 82 回コンテナ送り出し報告

国内事業担当事務局　入江　賢治

2023 年 8 月 10 日積み込み　　積み込み重量：24,947KG
横浜港出港：8 月 24 日　⇒　タイ・ラッカバン港到着：9 月 6 日

タイに向けた 3 回目のコンテナ送り出しを行いました。8 月の一番熱い最中となりましたが、回収協力団体や選別協力団体、大学生など総勢 34 名の方のボランティア協力がありました。

前回、前々回とタイへの輸出を 2 回行ない、現状ではタイでは販売が難しいアイテムが見えてきました。主には毛布・寝具類や下着類、タオル、ハンカチ、子ども服などです。それらはパキスタンでは需要が高く、これまで積極的に輸出してきたアイテムです。パキスタンの輸入規制自体は解除されたものの、輸入にあたり新たに必要な手続きが設けられ、直ぐには対応が難しいため、今回はタイに送る判断をしました。タイでの毛布等の販路調査は引き続き実行していきます。

今回輸出するアイテムは、PJ カンパニー代表カユームさん、卸業者 WAS インターナショナルのアリ・シャーさんと事前に話し合い、前述の販売の難しいアイテムは積まないことにしました。また、タイは高温多湿の気候のため冬物衣料は制限してきましたが、これから乾季（11～3 月）を迎え需要が高まるジャケット、セーター類は積み込むことにし、コンテナを満杯にする段取りを組みました。

当日はベール在庫の山から、積むものと保管するものを人力で分ける作業となりましたが、千葉ダルクのみなさんを中心に人海戦術で無事に終えることができました。

積み込み終了後の集合写真

このコンテナが良い結果に繋がることを願います。今後、現地から販売状況のフィードバックを受けて、それに対応できる国内の体制作りをすすめていきたいと思います。

チャエ ケ サート

「チャエ ケ サート」の意味は…パキスタンの公用語、ウルドゥ語で“チャエ”は「温かいミルクティー（チャイ）」“ケ サート”は「一緒に」、「チャイと一緒に」という意味になります。パキスタンではチャイを飲みながら賑やかにおしゃべりを楽しみます。

「ついた餅より心持ち」

パキスタンでは友人や知人から食事に招待されたり、またスラムのお宅を訪問する際も「せめて飲み物を」とチャイやジュースを出されることが多いです。彼らにその心持ちを尋ねると「客人歓待は、ハディース（イスラムの預言者ムハンマドの言行録で第 2 聖典）に書かれている、とても大切な事」だと教えてくれました。パキスタンのウルドゥ語では「メヘマーン・ナワズィー」と言われます。知人であってもそうでなくても、訪問者に食事や宿を提供することだけではなく、身の安全を確保することも含まれます。ホスピタリティーの語源はラテン語の Hospics（客人等の保護）だそうなので、「おもてなし」より意味が近そうですね。PJ カンパニー代表のカユームさんの話ではシンド州の農村では村ごとに客人が宿泊できる「メヘマーン・ハーナー」が用意されていることが多く、普段は村人が集う共有スペースとして使われているそうです。現地でいただく食事（ついた餅）も美味しいですが、彼らの心持ちを知ることで出された 1 杯のチャイが心に沁みます。

コンテナ到着報告とタイの古着マーケットの様子

海外事業担当　依知川　守

パキスタンへの輸出が、現地の輸入関税の引き上げや輸入制限などで困難となり、今年度はタイへ 3 回輸出しました。JFSA と連帯して事業を担う PJ カンパニー代表のアブドゥル・カユーム氏に聞きました。

Q1. PJ カンパニーは、AKBG が運営していた古着販売事業を引き継ぎました。会社はまだ始まったばかりですが、今後何を目指していますか？

A1. PJ カンパニーの事業目的は、アル・カイールに通う子どもたちのために利益を最大限に活用することです。現在は私が中心になり事業を進めていますが、将来的にはアル・カイールの卒業生も含めて雇用し、彼らと協力して PJ カンパニーの事業を推進したいと考えています。自らの手で暮らしを支える給料を作ることは、私たちの自信にも繋がります。

Q2. パキスタンの輸入制限により、JFSA の衣類やバッグなどをこれまでタイで 2 回販売しました。タイでの販売は、あなたとは旧知の仲であるアリ・シャー氏の WAS インターナショナルと協力して行われています。この 2 回の販売を通してこれまでのパキスタンのマーケットと比較しての違いはどのような点ですか？

A2. まずパキスタンとタイのマーケットは全く異なっていると感じています。パキスタンでは販売が困難であった品目（例えば女性夏物）もタイでは良い値段で売られています。またパキスタンでは低価格であれば冬物衣類の販売が可能でしたが、過去 2 回のコンテナの冬物は、タイでは販売が困難でした。

Q3. 今後に向け、タイではどのような調査をしているのですか？

A3. この 1 ヶ月程、私はタイに滞在してバンコク、ミャンマー国境付近のメーソート、タイ北部のチェンマイなど各地で調査を進めてきました。私の友人がメーソートにおり、アリ・シャー氏の顧客はチェンマイにいます。各地でそのような繋がりを辿り彼らと相談をしてきました。

Q4. 9 月にタイに到着する第 82 回コンテナの商品はどのように販売するつもりですか？

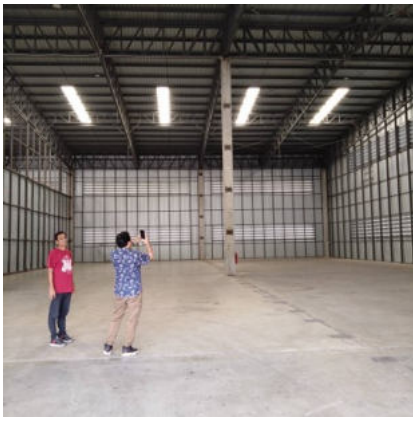
A4. 当初はバンコクかアランヤプラテートで荷下ろしする予定でしたがチェンマイの事業者との相談の結果、彼らの協力の元でチェンマイを拠点に販売を進めることにしました。

Q5. パキスタンの輸入制限は今後も続くのでしょうか？

A5. 現在のところ依然輸入には問題があります。このままでは JFSA にとっても PJ カンパニーにとっても不安定な状態が続いてしまいます。私たちは今後、タイ以外の輸出先も検討しておく必要があると思います。

Q6. 今後パキスタンの輸入規制が解除されたら、どのように事業を進めていきたいと考えていますか？

A6. 衣類を有効に活用できるよう、需要に合わせてパキスタンとタイへ振り分けることが望ましいと考えています



チェンマイで倉庫をみるカユーム氏（左）とアリ氏（右）

「レイアウト変更」

東葛センター担当事務局　田邉　航太郎

「レイアウトを変えたいです」

店舗担当スタッフの１人から声が上がりました。

コロナによる行動制限の緩和が少しずつ進んでいく中で、柏店『ｋａｐｒｅ（カプレ）』の様子も変わっていきました。制限の緩和により、お祭りやライブ、フェスなどのイベントや、スポーツ、旅行などを自由に行なえるようになり、多くの人たちの行動の選択肢が広がりました。そうした物（もの）から事（こと）、時（とき）と消費が分散、変化する影響は、物を販売する店舗にとっても大きく感じられるところでした。その変化の影響は柏店で３月中頃から顕著になり、結果としては大きく調子を落とすことになりました。そうした状況の変化は、毎朝のミーティングでも話し合っていました。そんな中で、スタッフの１人からレイアウト変更について相談を受けることになりました。

これまでの柏店は、広い店舗面積を活かして多くの商品を並べて求めやすい価格で提供するという、大型店のようなスタイルでした。豊富な量や様々な種類の古着の中から、自分の好きなものを探してもらうことを楽しんでもらえるように取り組んでいました。まさに物の消費を提供するスタイルです。それに対してその案は、店舗の一角、10坪ほどの床と壁を板張りにして、一か所だけ重点的に雰囲気を作り込み、お客さんと丁寧に話せる場所を作りたいということでした。コーディネートや商品説明だけでなく、裾上げ、丈詰めなどのサイズ直しやリメイクなど、服にまつわる様々なことの相談ができる場所です。コンセプトは”主観（Ｓｕｂｊｅｃｔｉｖｉｔｙ）“とし、それぞれが”こうありたい“と思える服を提供できるように、情報発信の際は担当者がお客さんの意見を引き出せるように一方的な発信ではなく交換となるように取り組みます。服装、恰好について、どうありたいか相談しながら一緒に考えて作っていく、それは、物に事と時を加えられるアイデアのように思いました。今までもお客さんから持ちかけられた場合に引き受けてきましたが、こちらから積極的に呼びかけて行なっては来ませんでした。２０１０年に東葛センターを開設して以来、内装と姿勢の変更として、一番大きな事のように思えました。

装いに内面は表れると思うので、ＪＦＳＡの店舗として”こうありたい“という姿勢をしっかり形に表せるように取り組んでいきたいと思います。

新たな環境で心機一転。来てくれる人へ常に新しい提案ができるように日々奮闘中

作業風景。“こうありたい”に向けて、みんなでワイワイ進めています。

「リユースでつなぐ 2」

国内事業担当事務局　大橋　紀子

ＪＦＳＡでは、幅広い種類の品物の回収を呼び掛け、それに応えていただきたくさんの品物が集まっていること、千葉店では集まった品物のリユース販売をすすめ、世代を問わず幅広い客層の来店があることを、前回の会報でお伝えしました。

特別暑かった今年の夏も、毎日たくさんの方々にご来店いただいて、そのことが、活動の継続に繋がっています。アルバイトやボランティアスタッフ、選別協力団体により、毎日、集まった品物の仕分け作業を進め、商品準備、品出しを行わないとそのような結果には結びつきません。

様々な世代の来店があるのと同様、ＪＦＳＡで働くスタッフも、子育て中のママさん、学生、フリーター、アーティストなど、世代や経歴も様々です。お店での接客も基本的なところはもちろん教えますが、お客さんの年代や求めているもの、各自の得意分野や相性など含めて一人一人違ってくるので、その場に応じた対応をしています。

毎年夏の時期の倉庫内での仕分け作業は、当たり前ですがとても暑いです。しかし、倉庫なので本格的な工事をしない限りは大きな改善はできないだろうと、扇風機と冷風機でなんとか暑さを乗り越えてきました。でも今年の暑さは特別で、これまでよりも早い時期から皆バテ気味で心配がありました。

ある朝、大学生のスタッフから、倉庫内の作業スペースの所にイベントなどで使っている日よけテントを張ってみてはどうかと提案があり、やってみました。結果としては、倉庫の屋根から降りてくる熱が遮られ、何もない所と比べると2度～3度ほど気温が下がっていました。彼は出勤ではない日にも色々と考えていたのでしょう、その後も皆が使い易いように改良を重ね、テントの周りをビニールシートで覆い、中に冷風機を入れた所、最も暑い日だと39・5度あった作業場の気温が30度近くまで下がりました。

8月～9月は、仕分けのボランティアとして新しく障害者支援の団体や、2回目となった千葉市内の高校の剣道部の皆さんの参加もありました。普段ここでの作業に慣れていない皆さんにとっては、暑くてとても大変だったと思います。しかし、改良を重ねたテントのおかげか、参加した皆さんからは、楽しかったのでまた参加したいですとのお声をいただきました。

これまで当たり前だったことも、ちょっとした発想の転換や、少し違う角度から見たときに出てくる工夫やアイデアで変えられると改めて気付かされました。そして色々な人が働く職場だという利点を大いに生かしてアイデアを皆で出し合い、環境を改善していくことで、より楽しく、継続して働きたいと思える場にしていきたいと思います。その結果として、また新たな方が活動へ参加することに繋がっていけたら良いです。

倉庫内に張った暑さよけテントと
提案したスタッフ

「臨時総会を開き監事の欠員補充を行ないました」

開催日：2023 年 7 月 27 日　　場所：千葉市美術館 11 階講堂

出席総数：142 名（本人出席 12 名、委任状出席 60 名、書面議決書 70 名）

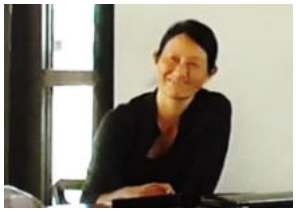
たいへん残念なことですが、2014 年より監事としてＪＦＳＡを支えてくださった水谷靖之さんが任期途中に急逝されました。これまでずっと、ＪＦＳＡでは監事はおひとりではなくお二人の方にお願いしてきました。そして、複数の方の視点からの判断とご意見で運営を支えていただき、また励ましていただいてきました。今後もそうしたかたちをとりたいと理事会で判断し、臨時総会を開催して監事の欠員補充を提案いたしました。新任の監事には増本綾子さんが就任されました。

常総生協での衣類・毛布・バッグなどの回収（写真中央が増本さん）

報告会＆意見交換会　「パキスタン洪水被災の復興支援活動」

臨時総会の後に報告会＆意見交換会を開きました。ゲストスピーカーには、ルワンダの農村地域で住宅や病院建設支援に取り組む庄（しょう）ゆた夏（か）さん（ニューヨーク州セラキュース大学建築学院准教授）をお迎えしました。庄さんは「家を建てる過程、建てた後に生まれるコミュニティも含むのが建築」と考えて、建物建設を通じた復興支援を続けている方です。資金はアメリカのケート・スペード財団からの援助ですが、自費で賄うことも多いそうです。今年ＪＦＳＡでは、パキスタン大洪水の被災復興支援を続けているアル・カイールアカデミーに協力して、カンパ活動を行なっています。庄さんの支援活動からぜひ学びたいと考えて、ゲストスピーカーをお願いしたところ快諾いただきました。

庄さんは友人がルワンダに行ったことで現地を訪れたことがきっかけとなり、ツチ族とフツ族の争いで荒廃した農村で、現地のＮＧＯと協力して建物建設の支援活動を始めたそうです。建設に必要な資材は可能な限り地元で手に入る材料を使います。そうすれば購入や輸送のコストを抑えることができます。また、そこに住む人たちにとって何が問題なのか、どんなことを希望しているのかを確認してすすめることが支援の基本ととらえ、聞き取り調査もしながら村落全体の家屋 370 軒の見取り図を作りました。



参加者の質問を受ける庄さん

しかし、住宅建設支援活動では、住民である村人の決定権がいちばん低いという現実があるといいます。決定権は１番がドナー、2 番が（ルワンダの）政府、3 番が（庄さんの勤務されている）大学の学長、4 番が地元の建設業者、5 番が村人になっていて、思うようにいかないこともあるそうです。それでも庄さんは村人の意見をしっかり聞いて、支援者（よそ者）という立ち位置にいる自分の関わり方を問いつつ活動を続けています。

日本でも庄さんの本が出版される企画があるそうです。興味のある方はぜひ読んでいただけたらと思います。

■□2023 年度（2023 年 10 月～2024 年9月）の正会員・支援メンバーを募集しています

NPO 法人 JFSA の会員は次の2種類です。

1. **会員（正会員）この法人の目的に賛同して入会した個人または団体**
2. **支援メンバー　この法人の目的に賛同し、賛助の意思を持つ個人または団体**

【2022 年度　正会員　個人：181 名・団体 11　支援メンバー　個人：1220 名・団体 8】

会員・支援メンバーの方には、会報（年3回）、回収のお知らせ（年3回）、サポーターグッズ（年1回）をお送りします。
正会員の方には総会議案書（年1回）もお届けします。

●年会費（10 月～翌年9月末）

個人：会員 5,000 円　／　支援メンバー2,000 円

団体：会員 50,000 円　／　支援メンバー　10,000 円

●会費振込み口座（郵便振替）

番号：00160-7-444198　口座名：JFSA

※活動への寄付にも同じ口座がご利用できます。

通信欄に「寄付」とお書き添え下さい。

◆JFSA の会報のバックナンバーをご覧いただけます◆

ホームページのトップページ中央

「JFSA のニュースレター（会報）」より

お進みください。ご希望の方には郵送もできます。

◆会報についての感想やご意見をお気軽にお寄せください◆

JFSA までメール・お手紙でお送りください。

jfsa@f3.dion.ne.jp

こちらの QR コードを読み取っていただくとメール作成画面になります